



① 次元にとどまらないのか。展示の冒頭で、まずはそのように感じていただけたらと考えました。

「セクション2『東京の日常』は、江戸時代から現代まで、時の流れと共に変化してきた東京における、人々の暮らしや街並みを取り上げたマンガやアニメが紹介されます。パリ展\*ではどのような反響がありましたか？」

「日本のマンガについてはよく知らなかったが、その文化的な厚みに感銘を受けた」というコメントを老夫婦からいただいたと、現地の学生スタッフが喜んでいました。また、会場には絵馬掛けを模した掲示板を設置して、来場者が自分の好きなキャラクターをカードに描いて掲げることができるようにしたのですが、開会数日にしてイラストが描かれたカードがびっしりと並びました。日本のマンガ・アニメ・ゲーム・特撮が、いかにフランスで愛好されてきたかを、あらためて感じることができました。

「セクション2『東京の日常』の締めくくりには、新海誠監督の『君の名は。』など2000年代以降から現在までの人気作が登場します。かつてのヒーローやヒロインといった際立ったキャラクター描写から、より身近な若者の生活描写などが増えていきます。こうしたフィクションの世界の



明治大学 国際日本学部 准教授 森川嘉一郎

この夏、東京・六本木の国立新美術館で開催の後、大分へ巡回する「MANGA都市TOKYO」展。日本のマンガ・アニメ・ゲーム・特撮の半世紀以上におよぶ歴史を「都市」を切り口に探り、約90に及ぶコンテンツの原画や映像によって紹介する貴重な展覧会です。展覧会ゲスト・キュレーターで、明治大学国際日本学部准教授の森川嘉一郎先生に展覧会の魅力を伺いました。

「さまざまなコンテンツが紹介される本展ですが、まずは『ゴジラ』ですね。日本を代表する特撮であり、長い間親しまれてきたゴジラですが、本展ではどのような意味を持ちますか？」

日本では、東京の大規模な破壊や、そこからの復興を描いた作品が数多く作られてきました。『ゴジラ』は1954年に公開された最初の映画を皮切りに、東京が変化を、展覧会ではどう捉えていますか？」

作品の多くは、その読者と同時代を舞台にしています。「東京の日常」をたどるセクションでは、基本的に時系列に作品を並べているので、パル景気のさなかにパブルを生きた読者に向けて描かれた作品群のすぐ後に、パブル崩壊後の停滞期に作られ、読まれた作品群が並びます。華やかなメトロポリスとして東京という舞台を描く作品が前者に目立つのに対し、後者には、生活を構成するディテールの美しさや陰りを接写したような描写が特徴的に見受けられます。そこには、東京のイメージの変化のみならず、都市に生きる読者層のリアリティの変化までもが写し取られているといえるかもしれません。しかも、その時々の中高生を主たる読者とする作品と、青年誌の作品と、女性誌の作品では、それぞれ同時代の見え方が違っているわけです。そのような多面的な鏡のよみかたを、マンガやアニメが帯びていることも感じていただけたらと思っています。

「セクション3では、都市にキャラクターが出現した事例を紹介していきます。山手線をキャラク

世界的な大都市として発展していく過程でたびたび現れ、その都度、新しいランドマークや開発地帯などを破壊していきました。結果、シリーズとして見渡すと、そこに東京の破壊と復興が反復されているわけです。

そのゴジラは、原爆のモチーフを背負いつつも、国家間の戦争における敵国とか、侵略者のような存在というよりは、宿命的に破壊をもたらす、人智を超えた荒ぶる神のような描かれ方がなされているように思います。加えて、ゴジラ映画では、ゴジラがもたらす都市破壊が作品の見どころとなるスペクタクルを構成し、とりわけ『シン・ゴジラ』においては崇高な美しさすら感じさせるように描かれています。このような描き方や破壊者像は、東京の破壊を描いた他の作品にもしばしば見受けられる特質です。

この展示は個々の作品を紹介することよりも、数多くの作品を通して東京とフィクションとの関係性を浮かび上がらせることに軸足を置いており、幅広い年代層にその特徴が知られているゴジラは、その意味でも展示にとって大きな拠り所となる存在です。



「展覧会は3つのセクションに分かれています。セクション1ではゴジラが占拠したり、突然、巨大なガンダムがお台場に現れたり、ゲリラ的とも言えるこうした試みは都市ならではです。大分の鑑賞者に楽しみ方やみどころをご紹介しますか？」

お台場のガンダムやコミックマーケットなど、大規模なものはそれぞれ大都市ならではの聖地巡礼など、フィクションと特定の場所との結び付きを活用する取り組みは、むしろ地方の方が豊かな事例が見受けられます。そのような、フィクションと場所との関係が持つさまざまな可能性の、東京という一つの街に関する事例集として眺めていただければと思います。

「最後に、「MANGA都市TOKYO」大分展をご覧になる来場者へのメッセージをお願いします。

「ゴジラ」や「AKIRA」のような、フィクション的な破壊やそこから復興途中の東京を描いた作品とともに、関東大震災や帝都復興計画など、歴史的な破壊や復興を伴った作品を、展示の冒頭で並べました。東京は江戸の頃から大規模な破壊とそこから復興を繰り返しており、かつて近い将来、半ば宿命のように大規模な震災に見舞われると常にいわれています。そのような東京の歴史や未来観がリアリティの基盤になって、東京を舞台とするフィクションが形成され、枠付けられているのではないかと。東京とフィクションとの関係性というのは、単に都内のランドマーク的な建物が登場したり、特定の街の風景が背景に描きこまれていたりといった



写真提供:森川嘉一郎、国立新美術館

私がはじめて展示のキュレーションらしきものに関わったのは、旧大分県立大分図書館が1998年にアートプラザに機能変換されたときに、その常設展となる磯崎新氏に関する展示の構成に参加し、パネルのデザインなどをさせていただいたときでした。その意味でも「MANGA都市TOKYO」展を大分で開催していただけることは、大変嬉しいことです。もともとパリという、東京から遠く離れた場所を会場にして、東京や東京を舞台とする作品を見ていただくために構成した展示です。ぜひ楽しんでいただけたらと思います。

\*本展は、2018年にパリにおける日本博「ジャポニズム2018」の事業の一環として開催された「MANGA都市TOKYO展」(ラ・ヴィレット、パリ)を元に日本巡回展として新たに展開されます。

DATA

TOSテレビ大分開局50周年・大分県立美術館開館5周年記念事業  
MANGA都市TOKYO  
ニッポンのマンガ・アニメ・ゲーム・特撮 2020

11/21(土)~2021/1/17(日) 休展日:12/21(月)  
▶大分県立美術館 1階 展示室A

●10:00~19:00、金・土曜~20:00※入場は閉館の30分前まで ●一般1,400(1,200)円、大学・高校生1,000(800)円、小中学生500(300)円※( )内は前売りおよび有料入場20名以上の団体料金。未就学児は無料。障がい者手帳等をご提示の方とその付添者(1名)は無料。学生の方は入場の際、学生証をご提示ください ●大分県立美術館 Tel:097-533-4500